

手紙

『吃音学を超えて』の著者一相沢浩二さんへ

突然、お便りします。私は吃音者です。あなたの『吃音学を超えて』を初めて読んだのは4年前、その時から感想一批判を書き、あなたにお送りしようと思いつつ、もう一度読み直してからとか、自分自身の掘り下げをなしてと思いつつ、なかなか果たせずもう4年、やっと2度目の読破を為して、あなたのジョンソンへの書式をまね、私は届く手紙として文を書き始めた次第です。

あなたの著書に挟まれた田口さんの書評では3度読めとのことで、確かに最初読んだ時の感想と2度目ではかなり違った感想を抱いたので、3度目の後再び変わる可能性を考へつつも、3度目がいつ読めるかと考える時、これ以上引き延ばしたくないという思いで、未消化を感じつつも文にしておきます。

断る必要もないと思いますが、あなたは権威主義を批判し歯に衣を着せぬ鋭い批判を展開されています。私は相手のこと、相手の関係性等を考へなかなか鋭さを持ちえないのですが、そのような批判一相互批判が好きで、相互性ということで、素直な感想一批判を展開しえ、受け止めて貰えると期待しています。前おきが長くなりました。本題に入ります。

私は相沢さんの批判の視点の鋭さに驚嘆していました。ただどのような立場から批判されているのかがなかなかつかめません。

あなたのジョンソンへの共鳴は彼が根源的なところから問いを発したということにあつたのではないのでしょうか、「吃音はあるのか？」と。

尤も、その問いに彼は意味論的なスリヌケを行い、自分自身がそれに応え切れていない、というあなたの批判があるのでしょうか。

その辺のところあなたの「フィロソフィが無い」という批判に結実しているのではないかと思うのです。

私は最初あなたのジョンソンの引用とその批判を近代知のワク内でのノミナリズムとマテアリズムの論争に準えていました。だがどうも分からないのです。

あなたのジョンソン批判は的を得ています。彼は主観的な観念論で共同主観性の問題を欠落させていること、彼が比較文化論的な視点を持ちながら、文化の違い一世界観の相異の問題を己の思想性の問題として煮詰めえず、突き出しえなかった、彼は結局近代合理主義のワク内から脱しえず、「吃音はあるのか？」という問い掛けにはらまれていた豊かな問題を意味論的にスリカエただけにとどまっています。

あなたの指摘は当たっているのです、でも何か違うと感じています。あなたはフィロソフィを問題にし「今日、総ざらいの点検を余儀なくされているのは、吃音論、言語病理学に止まるものではない。おそらく「近代的思惟」の頹落態がきっかけとなりつつも、「近代的思惟」の総体がそれを余儀なくされているのである。そのことに鈍感なままに、臨床上の直接的有効性や理論上の部分的有効性、あるいは構えにおける人間主義・子ども主義に

自足し切っている者は、おのれの気づかぬままに腐臭をまきちらしていくことにならざるを得ないのである。」

あなたが「近代的思惟」をどのようなところで問題にされているのかが、はっきりしてこないのです。少なくとも、近代合理主義の批判をされているのですが・・・。

ところでフィロソフィと言った時に、「哲学の存在意義はパラダイム・チェンジにある」という哲学者の提言があります。そして近代知の地平を超えとは、私は「実体主義」の止揚にあるのではと思うのですが・・・。それこそが、「近代的思惟」におけるフィロソフィだと思うのですが・・・。

なぜこのようなことを書いているのかと言えば、あなたがジョンソンの主観主義を、共同主観性の欠落を批判される時、わたしは逆に共同主観性への埋没を感じているからです。

あなたはジョンソンの「吃音はあるのか？」という問い掛けから一歩後退して「＜言語障害＞といわれるものがあるのは、ほんとうのところどうしてなのだろうか？」という問い掛けに陥っています。

言葉の揚げ足取りと言われるでしょうか？

でもそのようなことは、注七十二の「商品」を巡る論攷においても現れています。ここでも「商品」があるということ自体への問い掛けがなく、商品の時一空的変遷が問題になっているだけです。

更に、そのことはアメリカ・インディアンの‘吃音’に相当する言葉がないということも巡る論攷に於いても、言葉がないということが、なんらかの価値判断がないとは言えない、という「推論」にも関係しています。相沢さんはマルクスを援用されているし、言葉自体は使われていませんが、その概念的なことは使われているので、‘物象化’という概念を用いて説明します。ヒトの場合「物象化」ということと、その言語化ということが密接な関係を持っています。そして言語化一命名判断以前に価値判断が下されることは論理的に有り得ません。同時相即的ということはありませんが、論理的には命名判断の方が先行します。貴方の論理でいえば、‘物象化’と相即的に起きる言語化ということ以前に、価値判断が起きることになるのですが、・・・。

これは、「ある」というところの構造を捕らえ返す、作業の問題で、そもそも認識論的な「物象化」という概念で、世界を読み解くフィロソフィが問題になるのでしょうか、相沢さんはせっかくジョンソンが提起した「吃音はあるのか？」という問い掛けを相沢さん自身もスリヌケて、「ある」という前提で問題をとらえてしまっているのではないのでしょうか？

相沢さんのフィロソフィがないという批判は相沢さん自身にも返ってくるのではないのでしょうか？

さて最後に相沢さんの「吃音者宣言」批判、「障害個性論」批判について一言、「吃音者宣言」がジョンソン流の主観主義から生まれ出ていることや、「能力」だとか、「個性を生かし云々」というジョンソン的な「近代的思惟」に陥っていることには私も同調します。

ただ相沢さんはその批判をどのような立場からされているのでしょうか？

最初私は「手も足も、眼も鼻もなかったら？ それでもやはり「背が低いとか高いとか」と同じようなものだと言い切れますか？ また、“ひどい知恵おくれ”といわれる人や、“精神障害者”と言われる人についても、やはり、「個性」のなかに収めきる肝っ玉はありますか？ と。もちろん、自分に対してだけなら言えるとかいうマヤカシでは、駄目である。他者一般に対しても、よくそれをなしうるか、と問うているのであるから。（そこまで思想的責任をもって、断言・主張するなら、私たちもまた、それに対してトコトンつきあいたいと思うのだがー。）ということが相沢さん自身の思想性かと思っていました。でもいくらなんでも「近代」の批判をされる人がそのような世界観—思想性を持たれる訳がなく、この問い掛けはマルクスの「労働者階級の解放は労働者自身の事業である」ということになぞらえた「吃音者の解放は吃音者自身の事業である」という趣旨での問い掛けととらえ返そうとしています。

それでも問題は残っています。相沢さん自身はどのような立場で批判されているのか、ということです。

相沢さんが「近代的思惟」に批判的なことは表明されていますが、その内容がちっとも展開されていません。さらに現在の社会通念的な障害者観は展開されていますが、それに「個性」のなかに収めきる肝っ玉はありますか？」とされています。その社会通念に相沢さん自身が自身の中にある差別意識としてどう格闘されてきたのでしょうか。私には「思想的苦闘の血の痕跡など見出せない」のです。「そこまで思想的責任をもって、断言・主張するなら、私たちもまた、それに対してトコトンつきあいたいと思うのだがー」ということばで見いだせるのは、あなたの学者的な権威主義にすぎません。

私自身「吃音者宣言」の批判をしてきましたし、「障害個性論」を近代知のワク内からぬけだせていない、もっと掘り下げて異化される構造からとらえ返す必要があると批判します。だがそれは「障害個性論」は障害者解放運動の居直りの出発点としてあった、という評価を打ち消すものではありません。現実の運動は矛盾を孕みつつ展開します。それにアングジュしつつ、いかに己の思想性を展開しうるか、が問題になると思います。

私にはあなたの拘わりが理解できません。まさか現代の社会通念的な世界観に依拠して、治療者的に吃音者に拘わろうとされているのではないとは思いますが、あなたの文からは批判的批判者としてのかかわりしかとらえられないのです。

あなたの思想的格闘は「手も足も・・・」ということを巡ってあるのだと思います。そしてそのこと自身にあなたが答えられないとき、あなたのジョンソンや吃音学者に向かって投げ掛けた、フィロソフィがないだとか、スリカエをしているとか、権威主義的であるとか、格闘のあとが見いだせないとか、という言葉はそっくりあなたに返って来るのではないのでしょうか？

追記

あなたは、言語規範への逸脱ということで吃音者問題をとらえ、それを共同主観的な障

害者観一世界観の問題として煮詰めました。でも、それがなぜあのような「美意識」の問題に収束してしまうのでしょうか。

「美意識」というのはむしろ歴史的社会的相対性が強く、「個人」の趣味とされその相異なることが多いことです。そしてむしろ経済的關係から規定されることとしてあるのではないのでしょうか。

相沢さんの近代合理主義批判が、社会通念的な障害者観のベースとしてある生産性の論理を持ち出しを拒まれたのでしょうか、「美意識」がより普遍的なこととしてとらえられたのでしょうか？それがあなた自身の自問自答のような気がします。

あなたが展開されたことは、視覚的美意識にすぎません。かつ私が、障害者と接した時一度ならず「美しい」と感じたことがある、そして自分自身の障害者観が変わって来ると応えるだけで充分でないのでしょうか。

さて「トコトンつきあう」と宣言される相沢さん、「トコトンつきあう」までの論放になっていないかもしれません。そのことの批判も含め批判のお手紙頂けたら幸いです。